本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄 改版　特價 送料共 金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領　仝 金貳圓拾錢
一法華經要義　仝 金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓　仝 金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要　仝 金貳圓九拾錢

礒部滿事謹輯
一本多日生上人　特價 送料共 金壹圓七拾錢

申込所　東京市外南品川妙國寺境内「統一」發行所　振替東京五一〇七一番

一月刊「教」誌　定價一冊 送料 金拾錢　一ヶ年前金 送料共 金五圓　金壹圓貳拾錢

申込所　東京市外南品川妙國寺境内「教」發行所　振替東京一〇九四〇番

統一定價

一冊	金貳拾錢 送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢 送料共 前金之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢 送料共

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
半頁	金拾五圓
四分一頁	金九圓
五圓	前金之事

昭和七年五月廿四日印刷納本
昭和七年六月一日發行（第四百四十七號）

神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　礒部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　都印刷所　電話高輪六〇二四番
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番

不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

非常時―非常事……日生上人
十章鈔講義（續）……齋藤實
遍く教化關係の各位に告ぐ……上田辰卯
今後の經濟はどうしたらよいだらうか……中村清一
阿含の根柢を探りて（其二）……
日生上人を憶ふ（其八）……

記事
○統一團協賛會々報　○見聞錄
○教報　○團費誌料領收

第三十七年七月號

非常時——非常事

内ニハ政黨——財閥——農村——繫船——失業——等々S・O・S連リニ聞ユ。
外ニハ滿蒙——賠償——軍縮——聯盟——世界經濟危機ニシテ廿世紀ノ文明ハ暗影ヲ投ズ。
英傑出デヨ、救主再來セント叫ブヤ久ウシテ未ダ見エザルカ。見エザルハ出デザルニ非ラズ、知ラザルナリ、知ラレザルナリ。
十七億ノ大衆、其擧措ヲ失ヘルノ時、毅然トシテ其嚮フ所ヲ指示セル聖者已ニ我ニ在リ、聾盲ノ徒、之ヲ知ラザルノミ。知ラザルハ知ラザル者ノ咎ニアラズ、知ラシメザルノ罪ナリ、慈悲ノ用無ナカリシナリ。
今ニシテ『天晴地明』ノ大旆、顯揚ナクンバ何レノ日ヲカ期スベキ。時代對應ノ敎化ハ本團ノ使命ナリ、活動ノ旺盛ハ本團ノ標語ノ一ナリ、世法ノ開顯出世ノ統一ハ本團ノ生命ナリ。
非常時內閣、協力內閣、敎化內閣ハ單ニ名稱ニ止ムベキニ非ラズ、其實ヲ擧ゲシムベキナリ。私黨、利己ヲ捨テ、和衷協同ノ至誠ヲ竭スベキナリ。「和ヲ以テ貴トナス」「信ハ是レ義ノ本ナリ每事信アレ」「私ニ背キ公ニ向ヘ」トハ上宮ノ憲定。「上下心ヲ一ニセヨ」トハ明治戊辰ノ誓文。「殷ノ紂王ハ七十萬騎ナレドモ同體異心ナレバ戰ニ敗ケヌ、周ノ武王ハ八百人ナレドモ異體同心ナレバ勝ヌ。一人ノ心ナレドモ二ツノ心アレバ其心違テ成ズル事ナシ、百人千人ナレドモ一ツ心ナレバ必ズ事ヲ成ズ」トハ宗祖ノ明敎ナリ。
闘諍堅固ヲ慚ヨ、愧テ而シテ「白法光顯」ヘノ大精進コソ刻下最大ノ急務ナラン矣。
南無妙法蓮華經

十章鈔講義（續）

日生上人

三、智行と信行

第三段に至つて智行と信行との關係を說かれたので、此處には信行が十分には發揮されて居らんけれども、大體の注意を與へられた。圓の行と言つて智慧で行をする時分ならば、何でも宜いのである、これは華嚴經に善財童子が善知識を尋ねて、菩薩行とはどういふ事かと聞いて廻つた時分に、百十八人の善知識はいろ〳〵みな行が違つて居る、此處に書かれて居る通り

沙をかずへ大海をみるなを圓の行なり。（縮遺六七五）

とありますが、これは自在主童子といふのが沙を數へて居つたといふのである。善財童子が、斯ういふ善知識がどこそこに居るといふ事を人から聽いて尋ねて行つて見た。さうするとそれが今の自在主童子で、河の側で澤山ある沙を數へて居る、「あなたに菩薩行を尋ねに來ました」と言つた所が「さうか、菩薩行と言つて別に他には無い、この沙を數へて居れば宜しい」と言つた。をかしな話のやうだけれどもその時に自在主童子が說明して言ふには「自分は以前算術に志して居つた者である、所が或る菩薩に

頼つて佛法の眞理を聽かして呉れと言つた所が、お前は算術に明るい者であるから算數から佛法の眞理を敎へてやらう、數學といふものゝ玄妙なる所にやはり絕對の眞理があるといふ事を敎へられて、その數學から自分は眞理に到達して居る者である、それ故にこの沙を數へて居る、この數のこゝに自分は絕對の眞理を認めて居る』と云ふ事を言つた。この事は今日の哲學上の研究から言つても許さなければならぬので、沙を數へてその數の中に絕對の眞理を探るのは、決して僞りではなかつたであらうと思ふ。けれども今日吾々法華行者が、砂を數へて圓行の眞似をしても役に立たぬといふ事を日蓮聖人は言ふのである、その位の事は俺も知つて居るが、併しながら今の一般の日本人が佛敎を信ずるには、沙を數へる行では役に立たぬと言はれるのである。又大海を觀るといふのは、海雲比丘といふ人があつて、これもやはり善財童子が尋ねて行つた所が、『菩薩行と言つて他には無い。俺は毎日朝から晩まで海を觀て居る、海は實に廣濶なもので、見渡すかぎり際涯も無い、實に深さも深し偉大なるものである、絕對の眞理といふものは斯の如く際涯の無いものである、海には樣々なる德があるが、その海の具へて居る德が、實は宇宙の意味合ひを說明して居るものである、それ故に蠶の喰つた書物などは見ないで、俺は毎日海を觀て居る、こゝに菩薩行がある』と言つた。これも無論眞理に相違ない、達磨が壁に對つて九年坐禪をして居つたより、海雲比丘が海を觀て居つた方が意義が深かつたかも知れんけれども、左樣な行は今日は用ふべきものでない。さういふ方から言うたならば、お經を讀んで居るのも、念佛を唱へて居るのも、

阿呆陀羅經をやつて居るのも、皆そこに妙があるといふ事になる、夫婦喧嘩にも妙がある、『俺の菩薩行は夫婦喧嘩ぢや、女房の頭をポカッと殴くと、ブーッと膨れて出て來る、妙なものだ、十界互具といふ事は蠶の喰つたお經では分らなかつたけれども、この女房の頭を殴れば直ぐ憤れる、そこに明かに彼が瞋恚の性を有つて居る事が解かる、今度餘所から歸つて來て、懷から饅頭を出してやれば忽ち喜ぶ、實に活きた所のお經はこの女房だ』……さうも言へる。木魚を叩かうが皿を叩かうが皆圓の行だといふ事は言へるけれども、さういふ事は智慧の完成して行く方からは言ひ得られるけれども、信仰を以て宗敎の生命とする方からはいけないのである。それ故に信行の方から言へば南無妙法蓮華經と唱へて行くので、若し觀念を許すとするならば、一念三千の觀法でなければならぬ。これは佐渡以前の御書でありますから觀念を少し許すかの如きお言葉があります、佐渡以後の眞實の場合には日蓮聖人は觀念を許さないのでありますけれども、これは叡山で學同し居る三位公に送られた文章でありますから、暫く與へて、

心に存すべき事は一念三千の觀法なり。（稲遺六七五）

と言はれた、併しそれは智者の行であつて、優れた人間に於てはそれも宜からうけれども、今日本國の在家の人、即ち一般の國民には一向に南無妙法蓮華經と唱へさして、信念よりして進む所の行を立てなければならぬ。法華經の名前の呼び方は十七通りもあつて、いろ〳〵結構な名前が附いて居るけれど

も、その中で妙法蓮華經といふのが一番善いといふ事になつて居るから、總ての佛もみな妙法蓮華經と唱へられて居るのである、阿彌陀佛であつても法華經の化城諭品によれば、『當に樂うて是の妙法蓮華經を說く』と言つて、やはり法華經の好きな佛である。それ故に本當の阿彌陀佛ならば、やはり南無妙法蓮華經と唱へて居られたものである、常に樂うて妙法蓮華經を說くといふのに、彼は自分の名前などを言つて居りはせなかつたであらうと言はれて、此處にはザッと智慧行と信行との關係を明された。

これは佐渡以前であるから、十分な說明は完結して居らぬけれども、唯だ此處で見て置かんければならぬのは、日蓮主義者が智慧行で進んで行き居るのか、信念行で進んで行き居るのかといふ事であります、日蓮聖人の決心は無論信行正意であつて、三大秘法の宗旨を立てられたのは、悉くこの信念の宗旨になつて居るのである。それ故に沙を數へ大海を見る圓の行といふやうな、さういふ哲學風のものを以て日蓮主義の修行としてはならぬ。唯だ玆に二つの偏つたものがある、即ち左樣な理智の觀法——智慧で觀念するやうな事をえらい者ぢやといふやうに考へて行く、天台の方に似寄つたやうな事をやつて居る人がある、それは日透といふ學者があつて、『一念三千義』といふものを書いてその事を言つた、大體一般の今の日蓮宗の人はそれに感染れたやうな譯である、優陀那師が『本尊辨』を書いたけれども、そこが旨くきどめがつかぬので、やはり本尊をそこに置いてもこれは吾々の手本であると言つて、終ひには『本尊辨』の結論がやはり觀法のやうになつて居る、あれだけの學者であつたけれども、先生は信行正意といふ事が徹底して居らぬ、これが一つの偏つたものである。又モウ一つの偏つたものは、玆に俗信といふものが出て來て、本當の正確な信仰を敎へない、信心を許すといふ事になつたならば、所謂俗信で、日切のお祖師樣であるとか、厄除のお祖師樣であるとか、鬼子母神だとか帝釋だとか孤だとかいふやうなものを擔ぎ出して居る。即ち信仰といふ時になつたならば、正しき信仰を誤解して一般に墮落してしまふ、理智といふ時には觀念のやうなことになる、これはどつちもいかぬ、學者肌の者はこの理智の觀法に流れる所に違り損びがある、一般の樂欲信者といふものは俗信である、さうしてその中庸の善い所は空ッポである、それではいかん。本當の日蓮主義の行き方は、玆に正しき正信を主として、正信正解と言つて、觀法ではないけれども相當な理解を以て、斯ういふ說敎などを聽いて、相當な意識を備へた信仰を鼓吹しなければならぬ、「一貫三百どうでも宜い」といふやうな亂暴なものでは無い。信念正意であるけれども、その信念を間違へぬやうに、いろ〳〵敎の意味合ひを心得て、即ちそれだけの了解を持つた信仰を鼓吹して行くべきであります。この了解といふのは、觀念の智慧で宇宙を自から觀るとか、本尊も何も捨てゝしまつて自分の智慧で正覺を攫まうといふやうな事とはまるで違ふ、それは行き過ぎた者である、出來ない事をやらうとするのである、それならば寧ろ禪宗や天台宗のやうに行くが宜しい、日蓮主義ぢやナンといつて珠數を持つて南無妙法蓮華經などを唱へるのは廢めて、觀念觀法でやるが宜い、それは併し日蓮聖人の許したものではない。又彼の俗信のやうに本尊の何たるをも心得

す、信仰の意義を心得すして、唯だドンドコやるといふならば、何も日蓮主義を俟たぬ話である、それは大本教あたりの方が寧ろ上手ぢや、その方でやるならばモツと思ひ切つてやるが宜しい、觀念の方に行くならばモツと止觀のやうにやつて行かなければならぬ、學者肌としても出來損つて居る、俗信としても商賣が餘り上手でない、なまはんぢやくである。斯んな俗信は之を矯正し、斯ういふ觀念のやうな考へを蹴つて、正信正解を以て今後の日蓮主義の宣傳はやつて行かなければならぬのであります。

四、天台宗の墮落

次には天台宗の墮落した事を述べられた。それは大體今の天台の人などでも、南無阿彌陀佛と唱へるやうになつてしまつて、少しも法華經の色彩がない、天台の坊さんが珠數を繰つて何を言ふかと思へば「ナンマイダー」「ナンマイダー」と言つて居る、法華經の意味合ひを少しも發揮しない、それは善導、法然が立てた念佛門に天台宗が降伏をしたやうな事になつて居るのである。そこでまるで法華經の事は忘れてしまつて、『若し法華經をやるならば阿彌陀さんの世界に往生してから緩りやつた方が宜からう』といふやうな事を言ひ出した、そこで在家の人にも馬鹿にされて、天台宗は淨土宗の提燈持であるといふ風に考へられて、次第々々に天台の寺が壞はれて淨土宗が盛んになり、禪宗が盛んになるやうな事になつてしまつた。天台宗は以前總ての宗派を支配して居つたものであるけれども、遂に念佛門と禪宗の爲めに喰ひ荒されてしまつたのである。

五、謗法の根元

それから次には謗法の根元を明された。謗法といふのは佛法の紊亂でありますが、日本の佛教が何故に今日のやうに混亂を來たしたか、法華經を中心にしてやらなければならぬといふ事は、聖德太子を始め傳教も盛んに主張し、又今一切經を披けて見ても法華經に優るお經は無いのである、その比較に於ては少しも惑ふ所はない、阿彌陀經と法華經の比較といふやうな事は、ちよつと讀んで見たならば價値がまるで違ふ、華嚴經でも駄目である、唯だお經がだつ廣いばかりで迚もしやうがない、維摩經見たやうなものでもしやうがない、一番終ひに行つて「曰く言ひ難し」といふやうな事で、病氣の見舞も出來ぬやうになつて來て、默々といつて見た所でしやうがない、それは前に言ふ通り哲學的に宇宙の眞理を覺らんとするには宜いけれども、信仰が宗教の生命であると決定したならば、維摩經などは駄目である。又唯だお有難主義で阿彌陀經などをやつた所がやはり駄目である、前に言ふ正しき理解を加へて行けば、どうしても佛陀觀に就ては哲學上の思想からも搖ぶられぬやうな根據のある佛身觀を打立てなければならぬ、それは法華經に較べたならば、他のお經といふものゝ違ひは明白で、相似て居るといふやうな譯のものではない。富士の山が秀でて居るが如きもので、第二の山は何といふ山だといふやう

な比較ものが無い、實に法華經は卓越して居る。であるから法華經の藥王品には十の譬を擧げて、法華經は水に譬へたならば海である、他のお經は河や池みたやうなものだとある、どの河を持つて行つても、海とどつちが大きいかと言つて比較するやうな河があるか、ありはせぬ。池でもありはしない、どんな大きな池を持つて來て比較べて見ても、「さうだナア、寸法を取つて見ないと池の方が大きいかも知れん」……そんな池はない。又その次にはお日樣を擧げてある、光の中に於ては日天子これ第一なり、法華經も亦復是の如し、他の光を持つて行つて比較する事の出來ない一番大きな光が法華經である、マアお日樣の他に大きいと言へばお月樣位のものだけれども、お月樣の光とお日樣の光に於て優劣を爭ふ事は出來ない、どんな大きな電燈をつけても仕方がない、お日樣の光は卓越して居る。さういふ風に十の譬を擧げられて居るのは、皆比較が取れぬ大きなものを擧げられて居る。それ故に法華華はその深さを語れば海の如く、高きを語れば須彌山の如く、明かなることは日の如く、圓かなることは滿月の如しと言つて、總ての點に於て卓越して居る。今尙ほ日本人が法華經と阿彌陀經との優劣が分らぬナンといふのはボン暗である、比較するといふ餘地が無いぢやないか、讀んで見たら解かる、阿彌陀經と言つた所が二三枚のものであるから、讀んで見給へ、何でもない事が少しばかり言うてある、法華經は實に大組織のお經で立派なものである、日蓮聖人がその點に於て憤慨したのである、日の光と星の光とどつちが明るいかといふのに、「一寸待つて下さい」といふ、待つて下さいといふのはをかしいぢやないか、それ

はお日樣の方が明るいと直ちに答へなければならぬ、待つて下さいなどといふべき必要は無い。

法華經はさういふ意味に於て非常に秀でて居るが、それを前に言うた二圓同といふ事に依つて、何か似たやうなものを引張つて來て、法華經と同じいといふことから誤魔化さうとして來た、佛教が中心を失つたのはこの二圓同の考へが謗法の根元になつて居ると示された。この文章は記憶して置いて宜い、

九十六種の外道は佛慧比丘の威儀より起り、日本國の謗法は、爾前の圓と法華の圓と一つといふ義の盛んなりしよりこれ始まれり。（維遺六七六）

これは實に格言で、私共が日蓮主義を研究する時分には、年の行かぬ自分等もこれは暗誦にして居つた文であります。九十六種の外道は佛慧比丘の威儀より起るといふのはどういふ事かといふと、天竺の婆羅門外道といふものは九十五派六流に分れて爭うて、いろ〳〵なものになつて居つた、それは或は巖に自分の身をぶつけて身體から血を出して行をするとか、寒中素ッ裸になつて河の中に飛込むとか、いろ〳〵難行苦行をやつて居つた、その源は何處から興つたかというと、佛慧比丘といふえらい坊さんがあつて、この坊さんが山に入つて修行をして居つた。えらい坊さんでありますから相當な衣服も着て居つた譯であらうし、食物なども十分用意をして參つて、山の中で心閑かに佛道の修行をして居つた。そこに山賊がやつて來た、佛慧比丘が山の中に入つて佛道修行をして居るといふ事は相當許判になつて居

る、さうして粮米も持つて入つて居る、着物の用意、布團の用意もして行つて居るといふ事だ、彼處を襲うたならば相當な獲物があらうといふので、山賊が申合せて不意にやつて來て、着物から粮米から悉皆奪ひ取つて、素ッ裸にして身體には斑を負はして、後手に木に縛しつけて何處かに行つてしまつた。所が他の修行をする所の佛教徒が、佛慧比丘が山に入つたといふが、何でも大變善い修行を仕居るに違ひ無い、内證でそのやり方を見て來やうといふので行つて見た。さうすると後手に縛られて身體も所々斬られて血を流して素ッ裸で居る、それを見て「成る程、アゝいふ事をやらなければえらい者に成れないのだナ」といふので、それから歸つて來た連中が、これが本當の佛道修行だやと言つて素ッ裸になつて、身體を自分で斬つて血を出したり、縛つたりするやうな事をやつた。それが段々誤りを傳へて、遂に婆羅門外道が苦行をやり出したといふ。物の間違ひといふものはをかしなもので、九十五種六種にまで分派したる婆羅門の苦行外道の間違ひは、佛慧比丘の山賊の一件から起つたのである。そこで日本國の誘法は今は非常に廣いものである、他の宗旨の方が多くて、法華經を中心にせよといふものは少ないやうな事になつて居る、誰でも彼でも輪袈裟を懸けた者が「ナンマイダー」「ナンマイダー」とやつて居つて、佛教としてはあの方が通り相場のやうに思うて居る、佛教の講習會にでも行かうものならば、何宗から出て來た者でも數珠を繰つて「ナンマイダー」「ナンマイダー」とやつて居る。我輩は「止め給へ」と言ふ、「自分の宗旨でやつて居る時には宜いけれども、佛教講習會である、佛教共通の時分にはお釋迦

樣の事を言へ、せめて今日だけでも南無釋迦牟尼佛と言へ、ナンマイダーなんて言ふナ」と言つてやる。そんな事は彼等の方の内證の事ちや、佛教講習會では釋尊に先づ敬意を拂はなければならぬ、これを何か吾々が法華經の壽量品でも講じて、釋尊中心の主張を鼓吹すれば、「あれは法華坊主だから飛でもない事を言ふ、ナンマイダー、ナンマイダー」……それは非常な間違である。併しさういふ風に間違が澤山になつて來ると、間違つた事でもそれが善い事、當然の事のやうに思ふやうになる。お經に就て研究しても、日本の歴史に就て研究しても、今日の思想から研究しても、法華經を最上位に置いて佛教を觀なければ、方便の枝葉から佛教を用ひては、害を與へても益が無いといふ事は明白になつて居るのぢや。これは宗旨の議論ではない、日本の文明を如何にするか、人類の幸福を如何にするか、間違つた方便の教などを盛んにして「ナンマイダー、ナンマイダー」といふやうな事を言つて居つては、今後この文明が救はれないのである。

さういふやうな事が左樣な廣い意味に擴まつたのも、實は天台の學者が二圓同ナンといふ事を許したからで、若しも彼等が何處までも方便の教と法華經の眞實の教とは非常に違ふといふ事を明かにし、一旦許しても必ずやそこにきどめを抑へて、「同じい」と一旦許しても法華經に一點でも反抗する事があるならば、この同じいといふ事は許さぬぞ、從順に法華經の前に服從するとき「同」の字を許すけれども、少しでも背き、或は法華經より上に出やうといふやうな考があれば、直ちに切捨てられるぞといふ嚴命

を下さなければならなかつたのである。それを弛めたが爲めに斯の如く雜亂の佛敎といつて、佛敎の方便と眞實が顚倒するやうな事になつたのである。これは思想を研究する上に於て大いに注意すべきで、日蓮聖人は斯ういふ事をその次に書いて居られる。

あはれなるかなや、外道は常樂我淨と立しかば、佛世にいでまさせ給ては苦空無常無我と說かせ給ひき。（維遺六七六）

實にこれは立派な御議論でありまして、外道の方にも常樂我常といふ思想はあつた、この文字は差支ないけれども、その本當の意味を彼等は誤解して、「常」といふ事も唯だ天なら天に生れたらそれで事が足りると思ひ、又「樂」といふ事でも物質的に考へて、美味い物でも食べる——丁度今日普通の人が考へて、極樂に往生すれば牡丹餅が食ひたいと思つて手を叩けば直き牡丹餅が來る、刺身が食ひたいと思へば直き刺身が來ると思つて居る、あの意味がこれと同じ事である、少しも善い事を積んで善い働きに行かうとは思はない、今の迷うて居る精神の儘で、今はこんなに働かんならんけれども、極樂へ行つたら仰向に寢たきりで、手を叩けば何でも持つて來るといふ、道樂の一番よく出來る所見たやうに思つて、電話など掛けなくても周圍に女が大勢來て、さうしてはな代も掃はなくても宜いといふやうな事を考へて居る。丁度あゝいふ思想で、外道は常樂我淨の「我」といふやうな事でも、皆さういふ風に低級な思想でこれを解釋して居つた。今の文明でもやはり斯ういふやうな意味合はある、第一人間が死なない物のやうな考が非常に强くなつて、現在主義が强くなつて、享樂主義を唱へて居るけれども、併しさういふ事を言つて居るそこに却つて苦痛があるのである。パンのみ得たら幸福だと思ふが故に、そこに飢へて露西亞のやうに饑餓に迫るやうな事が出來る、享樂をのみ叫んで居るが故にそこに相殘害して、非常な苦痛が起つて來る、自我のみを主張するが故に、却つて頭をどつかれて自由は無くなつてしまふ。道德的に互に讓歩して「己れ達せんと欲すれば、先づ人を達す」といふやうな行き方をすれば宜いのであるが、そんなうま味は今の人には分らぬ、今は己れ達せんと欲せば人を殴り倒しても達するといふ、「人を達するナンてそんな能間な事を言つて居つて間しよくに合ふか、人を突き飛ばしても引奪くれ」といふやうな、非常に淺薄な思想である。であるからさういふ風に婆羅門外道が常樂我淨と言つて居つたその字は宜かつたけれども、意味が缺けて居つたから、先づこの惡い癖を擊たんならんといふので、いきなりお釋迦樣はこれを「無常」と說いた、「常」といふ事に對しては「諸行無常」といふ事を强く說いた、何物と雖も常住なるものは無い、咲いた花は散つて行くだらう、生れた人間は死ぬだらうといふやうに、有爲無常といつて「色は匂へど散りぬるを我が世たれぞ常ならむ」といふこの思想を盛んに說いた。それから「樂」といふよりも人生は非常に苦みが多い、人生は煩悶の巷である、三界はこれ苦なりと言つて、全く正反對の事を說かれた。これは婆羅門の弊を打破するが爲めに說いたのであるが、併し更に

今度進んで釋迦が眞實を現はす時には、やはり元の常樂我淨を說かれた、眞正な意味を以て法華經にも涅槃經にも常樂我淨を說いて、眞の意味の實在不滅の生活を說いたのである。この關係はモウ少し詳しく言はなければ分らぬけれども、それは非常に廣い話で、これを本當に言へば、婆羅門の敎と、小乘の敎と、大乘の敎と、非常に廣い思想史に亘つての話をしなければならぬ、此處では唯ださういふ意味だといふことだけを知つて居れば宜しい。この「常樂我淨」といふ字は差支ないけれども、內容が缺けて居つた爲に正反對の議論を以てこれを打破つた、そこですつかり癖が無くなつて綺麗な白紙になつてから、今度又新しく「常樂我淨」の思想を說いたのであります。これは乘馬の稽古などをするのでもさういふものぢやと聞いて居る、今まで自己流で勝手に乘つて居つた奴はいけないと言つて、本當の馬の先生に就くと元やつて居つたのをすつかり忘れさせて、一番最初に立歸つて新しく敎へる。お經などでもやはりさういふやうなもので、素人が假名で讀んで來たお經はお寺に來て習ふ時には洵に困る、そこで何にも覺えて居ない新しいお經から敎へると、その方が能く行く、癖が附いてしまつて居る者は、一旦忘れさせなければどうしてもいけない、その事を言ふのである。そこでこの無常觀などを盛んに說かれた爲めに、二乘が又これに拘泥して、却て無常とか、空とかいふことに拘泥したので、今度はそれではいかぬと言つて、又これを攻擊し、罪ある者は佛になつても、汝等は却て佛になることが出來ないと戒められた、何の爲に斯の如くなさつたかと言へば、即ち癖のある者はその儘許すことが出來ないからで

ある。

その通りで今日の念佛宗なども、完全な意味に於て佛を念するといふ事は何も差支ない、本佛を念するとか、過ちの無い意味に於て三世十方の佛を念するといふことは、佛敎の敎旨であるけれども、一向念佛と言つて、阿彌陀佛を念する爲めにお釋迦樣を排斥する、これが法然の念佛である。それを驅されて「念佛といつても惡いことはないぢやないか、佛を念するのが何が惡い」と言ふが、さうではない、念するのは唯だ一つで捨てる方が多い、そこを考へなければならぬ。法然の念佛は『撰擇集』といふものを書いたが、『撰擇集』に五種の正行雜行を立てゝ、さうして阿彌陀佛より外のものは一切こまを嚴禁したものである、第一に讀誦正行と言へば、阿彌陀の有難い事の書いてあるお經より外は一切讀むことはならぬ、阿彌陀の有難い事以外の事の說いてあるお經を讀んだらそれは讀誦雜行ぢやといふ、それから禮拜正行と言つて、阿彌陀を拜むのは宜いけれども、他のものはお釋迦樣を拜まうが、天照大神を拜まうが、誰を拜んでも外のものを拜んだらそれは禮拜雜行ぢやと言ふ、それから讚歎正行と言つて、これは讚めることであるが、阿彌陀の有難い事は讚めるが宜いけれども、他のお釋迦樣が有難いとか、天照大神が有難いとか言つて讚めたら、それは讚歎雜行ぢやといふ、それから第四が稱名正行、稱名雜行と言つて「南無阿彌陀佛」と言ふより外一切稱へることはならぬ、「南無釋迦牟尼佛」と言つたり、『南無妙法蓮華經』と言つたりする者があつたら、それは稱名雜行ぢやといふ、それから觀察正行と言

つて、阿彌陀の有難い事、阿彌陀の世界の嬉しい事だけは考へて宜いけれども、他の事を考へてはいかぬ、お釈迦様が有難いとか、誰が有難いとか考へてはいかぬといふ、非常にやきもちやき見たやうな考で、『あなた、外の女の事を考へてはいけませぬよ』といふやうな譯である。さういふやうなことを言つて、阿陀彌以外のものは見向もするなと言ふ、その雜行として捨てた中に釋迦牟尼如來を始め、三世十方の諸佛が皆捨てられて居る、我國に於ては天照大神を始め澤山の神々でも皆捨てられて居る、唯だ取るものは一個の阿彌陀だけであるから、捨てる方が多い、それを日蓮聖人が攻撃したのである。それから又親鸞は一層それを窮窟に言つて、一向宗といふことを言ひ出した。その後に蓮如といふ人が出て、『改悔文』といふものを作つて、一時大分亂れて居つたのをこの改悔文で全國をずつと說教をし試驗して廻つた、それは何が書いてあるかといふと、「雜行雜修を振すてゝ只ひたすらに」といふ、そればかり言はせた、振すてゝ〳〵といふことばかり言はせて來た、さうして唯だ一向專念といふ、馬車馬式にやつて來たのである。

それ故にさういふ意味に於てやつた念佛主義なるものは、法華經を失ふ事を目的として出來て居る宗旨である、法然の書いた『撰擇集』といふものは、いろ〳〵攻撃して居るけれども、目指す敵は即ち法華經である。それであるから今でも一番の敵を法華宗として居る、日蓮聖人を顎の座に据へたのも念佛門徒である、德川時代に日蓮主義を迫害したのも皆念佛門徒である、今でも法華宗の發展を抑壓せんとする者は念佛門徒である、佛教の中に於ての決戰點は一向彌陀主義と法華經の開顯統一主義の鬪ひである。所が彼は割合に隱忍である、正面の敎から言へば與し易きものだけれども、初めから讒言をして日蓮聖人を顎の座に据へたり何かする、石を打つけたり、火を放けたりするやうなやり方で、法門を以て邪正を爭ふのではない、前年格言運動が起つた時でもさうである、陰から裁判官の方に運動したり、いろ〳〵緣故のある人を傳うて運動などをやつて、正々堂々爭ふ事はしない。今日でもやはりさうだや、私等に對しても隨分いろ〳〵の妨害をするけれども、こつちはそんな事は構はずどん〳〵やるものだから妨害がしきれない、名古屋、京都、大阪、神戸、その他へも毎月行くが、あつちこつちで隱忍な反對を試みて居るが、今日は時勢が一轉した爲めに、さう云ふ隱忍な手段では抑へきれなくなつた、これが德川時代であつたならば、どうに吾輩等は牢にも入れられ、流し者にもあつて居る、日本橋の上にも何逼か曝されて居るであらう。併し今はそれが出來ない。

當世の念佛は法華經を國に失ふ念佛なり。設ひ善たりとも義分あたれりといふとも、先づ名を忌むべし。（給遺六七六）

假りに向ふの言ひ草が善いからといつても、法華經を失はんとする目的を以て起つた狹義な一向念佛であるから、先づ念佛といふ名前からして許すことは出來ないと言つてある。これは永久にその通りであ

る、何も法華宗は阿彌陀といふ佛樣を敵とするのではないのであつて、阿彌陀といふ佛は釋尊に就ては本地垂迹の關係から、法華經の中にも現れて來るけれども、この法然の立てた一向專念の阿彌陀佛、五種の正行雜行に依つて立てた主義を攻擊するのであります。三世十方の諸佛が本佛釋尊と天月水月の關係に於て存するといふは、何も差支はない、日蓮主義は一切の佛、一切の菩薩、一切の神、皆その存在を認める主義である、少しも狹いことは言はない、唯だこの法然等が立てた所の主義は、狹隘なる排斥的なる思想に依つて法華經を壓迫して居るから、それを攻擊したものである。

六、日本國と法華經

その次には日本國と法華經との關係が說かれて居る。國に依つては低い敎で濟む國もあるであらうけれども、日本といふ國は立派な天職があるのであるから、方便の敎に滿足すべき國でない、一番善い敎を弘めんければいけないといふのが、日蓮聖人の主張である。佛法は國に隨ふべしと言つて、我國の國體といひ、國家の理想といひ、目的が非常に立派であるから、方便の敎や間に合せの宗敎を以て濟ますべきものではない、最も完全なる法華經を以て日本の敎としなければならぬ。

日本國は一向大乘の國、大乘の中には一乘の國なり。（繪遺六七七）

然るにこの立派な國に粗末な敎を弘めやうとするから、國と敎とが相應しない、日蓮聖人は寶器に糞を盛るが如しと言はれて居る、非常な美しい器に糞を載せるが如きことはいかぬ、この日本の國民に與へるものは、宗敎としては最高完全なる敎を持つて來なければならぬと言はれた。この點は實に一言無いと思ふ、今まで餘りに方便の敎を永く用ひ過ぎて居る、であるから今頃世界の思想が來てまごつくナンといふことは、世界に光を顯はす日本としては甚だ慚愧に堪へぬことである、世界の思想が幾ら來たからといつても、法華經のやうな立派な主義信念に立つて居つたならば、何もまごつくことはなかつたらうと思ふ。この事は將來愈々明かになつて參らうと思ふ、日本が眞に榮へるならば必ず法華經は世に出る、法華經が永遠に世に出ないならば日本の國は亡びる。

七、能開の法華經

それから次には能開所開といふことに就て、能開の法華經の經功を述べられた。これは開會といふことに就ては「所」といふ開會される方と、「能」といふ開會する方との違ひを忘れぬやうにしなければならぬ、朝鮮と日本は合併したのであるけれども、この場合は日本が能開者である、朝鮮は所開者である、一つになつたからといつても、その能所の關係を間違へてはいけない。お寺に行くと「お所化樣」といふのがあるが、それはそれを敎へるお能化樣といふのがあつて、それに敎化されて居るからお所化樣と

いふ、學校で言へば先生と學生といふやうなものである、それが顚倒つてはいかん。一つの所へ入つて平等であるとか、同じやうにやるからと言つても、そこに自ら區別が立つて來るのである、今のデモクラシーの思想などが、やはりこの能開所開の關係を混亂するのである、世の中には、同じいと言つても先覺後覺といつて、先に物を知つて居る人と、後から敎はる人の違ひがある、家に於ては親と子といふ關係がある、總べて社會を構成して居るに於て、皆同じ物だといふものはありはせぬ。唯だ同じいといふことは、一つ家に於ては家族は皆同じだと言へるけれども、同じいと言つたからといつても、「お父さん、今夜はあなたが布團をお敷きなさい」といふ譯にはいかぬ、同じいといふことは或る意味に於て與へられて居るが、そこに親は親、子は子、夫は夫、妻は妻といふことがなければ、唯だ同じちやといふことを振廻して「昨日は妾が朝起きて御飯を炊いたから、今朝はあなたが起きて御飯をお炊きなさい」……それはいかぬ、そこに思想の混亂がある。それ故に法華經は一切經を一つの敎と見る、總べての思想を打つて一團とするやうな思想であるけれども、能開所開といふことを忘れぬやうにして行かなければならぬ、法華經は能開、念佛は所開である、法華宗は決して阿彌陀經を捨てる譯でも、阿彌陀如來を捨てる譯でもない、皆それは法華經の開會の中に容れらるべきものである。

譬へば如意寶珠の金銀等の財を備へたるが如し。（續六七七遺）

法華經は如意寶珠の如く、彼等の總べてのものは金銀の如きものである、一切を包含して居るものが法華經である、それ故に澤山の寶を積んでも一つの如意寶珠には敵はん。我が國體で言つたならば、日本の皇室とか、日本の文明の中心を爲し、國家の生命となつて居る所の思想がある、これは世界の總べての文明に卓越して居るものと日本人は信じて居らなければいかぬ。如何なる哲學、如何なる宗敎、如何なる道德、何が來ても、我が建國以來傳はつて居る、即ち「國ヲ肇ムルコト宏遠、德ヲ樹ツルコト深厚」といふ、この日本の國と共に發現して居る所の大精神といふものは、總べての文化に卓越して居るものなりといふことを信じなければならぬ、それまでも動かさうといふことになつた時は、全く國家を誤るものである。

八、開會後の權實

それ故にその次に至つて開會後の權實といふことを說かれた。開會して同じものにしても、やはり方便は方便、眞實は眞實といふことを分けて置かなければいかぬ。一旦開會したらもう同一だといふことに纏が弛んでしまふと、非常な間違ひが出來て來る。それ故に斯の如く日蓮聖人はお書きになつて居る。

設ひ開會をさとれる念佛なりとも、猶ほ體內の權なり、體內の實に及ばず。

何に況んや當世に開會を心得たる智者も少なくこそをはすらめ。（縮六七七）

開顯した中にもやはり權と實といふことの區域を立てなければならぬ。一切の萬有は妙法の一つに歸するといふ時には、一切これ妙法ならざるものはない、一切が妙法であるけれども、併し山は山、海は海である、一切の者皆十界具足の妙體であると言つても、女は女、男は男である、同じいと言つたからといつて、自分が男か女か分らなくなつては仕樣がない。或る點に於て同じいといふ事があつても、直ぐ又各々の位置に歸らなければならぬ。人間の體といふものは何處も大事なものだ。目が見えなくなつても困る、口が利けなくなつても困る、大切なことは同じだ、人間の體は何處を捨てゝ宜いといふものはないと言ふ、「さうか」と言つて同じものならば目で物を食はう……と言つてもそれは出來ない、同じものだと言つても目が口の眞似をしたり、鼻が耳の眞似をしたり、そんなことは出來ぬ、やはり元の位地に歸らなければならぬ、それが平等にして差別といふことである。法華經は開會をしたからと言つても直ぐにそこに方便の敎と眞實の敎といふものゝ違ひがあることを、少しも弛めないやうにやつて行く、所謂開會後の權實といふことが日蓮主義の大切な所である。だから一致派といふやうなことを言ふのは大いに間違つて居る、法華經で言へば開會してもやはりそこに區域を立てなければならぬといふので、勝劣といふ主張がある、そんな事で一致ぢや、勝劣ぢやと言つて喧嘩して派が分れたけれども、それは喧嘩をする必要はない。大體は一致派といふものが日蓮主義を混亂せしめた、勝劣にも頑冥の輩はあるが、大體としては日蓮主義は混亂する思想は採らないのである。腹は廣いけれども、ちやんと規律を嚴重に立てゝ行くのが日蓮主義である。故に日蓮聖人が國家の政治に就ては北條の跋扈を痛擊して、大義名分を說かれたのである、その通り佛敎に於ては法華經を最上の敎としなければならぬといふ、非常に廣い思想の下に秩序を重んじたのが日蓮主義であります。

九、問註に就ての注意

それから第九段に至つて問註に就ての注意を書かれた。問註といふのは裁判所の事でありますが、日蓮聖人に對して讒言する者があつた爲めに、平左衛門といふ北條の內管領の役をして居る者がいろ〳〵の事の取調べを始めた、それで手下の少弼といふ人に言附けて、日蓮聖人から口供書を提出せしめた。その內容は茲に詳しく出て居らぬけれども、何時も問題になつたのは大抵分つて居るのである。それは日蓮聖人は僧侶でありながら刀を庵室の中に貯へて居る、或は信者が改宗する時に今まで祀つて居つた所の佛像などを川の中に拋り込んで慘酷な事をする、或は北條の武運を呪詛して居る所の者であるといふやうないろ〳〵な事を讒言したのである。さういふ事に就て少弼といふ人から日蓮聖人に對して、斯ういふ訴人があるが答辯をせよといふことであつたと見える。そこで日蓮聖人が答辯書を出された。そ

れが大分噂になつて居つたものであるから、三位公が京都に居つて非常に心配して居られるといふので、安心するやうに書かれたのである。

問註所から言ふて來た事は、日蓮の答辯が道理が詰んで居るから、これを決斷することは困るだらう、日蓮を勝たすならば直ぐ判決が附く譯だけれども、勝たしたくはないのだらうから、何時までも引掛つて居る、向ふを勝たさうと思へば日蓮の言ふ道理がピンとして居るからちよつと困るだらうといふやうな、面白い事を書いて居られる。殊に面白い評判がこの頃鎌倉に立つて居る、それは『日蓮は法門の事では分らぬことを言ふ（分らぬ事と言ふといふのは反對の宗旨の坊主共が言ふので無論聖人は分らぬことは仰しやらぬ）けれども今度の問註所への答辯書は非常に立派に出來て居るさうだ』と言つて評判をして居る、それは日蓮聖人が立派に答辯されて居つた爲めに、矢も双も立たぬものであるから、裁判所で困つて居る譯である。併しその後これから段々事件が進んで、愈々『一昨日御書』にある通り、この年の九月九日に及んで更に問註所へ呼出して、今度は「日蓮は事を佛法に寄せて政道を紊る者なり」といふので、終に日蓮聖人を頸の座に引出すのである。これはその年五月の御文章で、この事がずつと關係して行つたのである。左樣な譯であるからマア心配して呉れるな、少弼殿に出した書面は平左衛門の方に廻つたといふことを聞いて居るけれども、問註所の方に於ては容易に決定を與へることは出來まい、併し何時かは決定するだらう、どう決定するかそれは分らぬけれども、心配することはない、又永引いて居ることを心配するといふ事があるかも知れぬけれども、永引いて居るといふのは、日蓮の言ふことが道理がつんで居るが故に、仕末に困つて永引いて居るのだから、安心して居つて宜からうといふやうな事を書かれて、自分の弟子に心配をせんやうにと申し送られた。

それから最後に、この頃段々法門を聞きに來る人があるが、殊にこの頃は天台の方の人、眞言の方の人が多く教を受けに來るといふ事を書かれて、いろ〳〵書きたいこともあるけれども、用事が多いからこれで筆を止めるといふことで、この御文章が終つて居るのであります。

この『十章鈔』は大分難しい御書でありますが、併しその中に大切な所があらうと思ふ、細かい事は記憶することが出來ぬにしても、日蓮聖人の教を建たられた思召の在る所は分ると思ふのである。先づ法華經の卓越して居る事を何處までも瑕つけぬやうにして、他に似たやうな思想があつてもそれに引摺り落されないやうに、飽くまでも法華經を本意にして一切の思想を解決して行かなければならぬ。廣く他のものを容れても、それが爲めに法華經の權威を失墜するやうなことのないやうに、又智慧の方で行くならばいろ〳〵廣いやうな話もあるけれども、信仰を本意にする者は教義の中心を動かしてはいかぬ、信念で進む人としてはいつきり法華經の有難い事を心得てやつて行かなければならぬといふことを說かれて居るのであります。さうしてこれは初めに申した通り、今日の日本の思想界の爲めに大なる參考となり、又現在の日蓮主義者の墮落して居る者の頂門の金針とならうと思ふのであります。（完）

遍く教化關係の各位に告ぐ

内閣總理大臣　子爵　齊藤　實

不肖、圖らずも内閣組織の大命を拜し、國政變理の任に當るに際し、聊か衷情を披瀝して遍く教化關係各位に告げ、その奮勵と協力とを切望せんとす。

今回の大命降下は全く不肖の豫期せざりし所にして、もとより何等準備の之れに供ふるものあるにあらざりしと雖、國家非常の時に際し國政一日も忽にすべからず民心一刻も危惧あらしむべからざるを念ひ、老軀を提げて急遽組閣の事に從ひ、平生靜かに考察したる世相の現狀と、人心の歸趨とに鑑み、此の時局を敢拾し、此の民心を安定せしむるの途は擧國一致、之れに當るにあらずんば其の目的の達し難きを想ひ、廣く各方面の理解を得て、其の協力を煩はし、茲に各派を包容せる、所謂擧國一致の内閣を組織し、公明の政治を國民の前に展開し赤誠を傾注して君國に報じ、一身を賭して此の難局に當らんとするに至つたのである。

今や世界は一大危機に當面し人類は空前の不安に逢着し、各國は鋭意經濟的破綻の縫繕を策して其の方途に苦しみ、相互利害の衝突は延いて國際場裡の波瀾となり、外交辭禮の裏面にも禍機は隱約の間に伏在し特に我が對滿政策の如きも、甚く列國の神經を刺戟し、一擧一動悉く其の視聽に觸れ、措置毫釐を誤れば國家千歲の悔を遺さんとし之に加ふるに世界的なる財界不況の旋風は我國を襲ふて全產業を打擊し、資本、勞働の對立を深酷にすると共に農村の疲弊困憊は其の極度に達し、國民の大部分は生活に多大の脅威を感じ、詭激の論其の間に乘じて煽動怠るなく、粗暴の擧、その中より生じて人心を戰慄せしめ、所謂内憂外患交々到るの狀況を呈露せるは現下の國情である。此の時に當り之が處理に當るべき國政は如何の狀に置かれたりやといふにこれに參與する多くの政治家は傳統の久しき黨派の偏執に囚はれて公明の態度を缺き、一國の政治をして民衆と相距る遠からしめ、宿弊百出、終に人をして政黨を厭惡せしめ政治を唾棄せしむるに至つたのも現下の國情である。政黨の革新は時代の要求にして政治の淨化は一切の禍根を芟除するの根本である。

既成政黨の批難此の如くにして政治に威信なからんとし、民は歸趨に迷ふ時に當り、新興無產政黨は又徒らに階級鬪爭を激發して民衆に煽ることを知つて眞に全社會、全階級の福利を思はず、妄りに民心を乖離せしめて事態を益々紛糾せしめんとす此時に當りて、國民の自覺と協力とに待つ經濟統制を行ひ、階級的反目を除去して、全階級の福利增進を企劃し、眞に擧國一致の共同生存に基く社會へと一歩を進めしむるも亦刻下の急務にして、國民生活の安定は此基礎の上に築き上げられなければならぬ。

現内閣は實に此使命をも擔ひ來つたのであつて、其の根本に國民の自覺ある協力に待つあるは今更ら喋々の辯を費すを要せぬ。所詮、現下の政局は民心の安定を先決問題とし、此安定を策する國民の信賴に基く政治を行ふより急なるはない。國民の信賴に基く政治を行ふの途は政治を現在の醜體より救ひ、政黨を淨化するより急なるはない。

政治の淨化は黨人の自覺を先きとするも、更に根本的なるはかゝる輩をして政治の局面に立たしめざる選擧の公正であり選擧の公正を保つの第一歩は國民各自が立憲國民としての責任を自覺するに初まる。國民各自をして此立憲的自覺を養はしむる、之れを教化に待つなくして抑も何をか賴むべき。教化

は各自の覺醒を促し、各自の覺醒は終に擧國一致の協力にまで高めらる。

擧國一致の內閣は擧國一致の國民の基礎に立たねばならぬ。擧國一致とは何ぞ國民各自が利己的偏執や黨派的若しくは階級的私情を去つて眞に國家の一員としての自覺とその全體的協力の必要に目覺むることによつて發現せらるゝ國民的覺醒にして、もとより一黨一派に偏すべきものでもなければ、一階級一職業に私せらるべきものでもない、日本國民としての全體的自覺であり、陛下の赤子としての全階級的協力である。我が日本は、陛下の日本であると共に、又國民の日本である。陛下の日本なるが故に盡忠報國の至誠を致さねばならぬが、國民の日本なるが故に相互痛痒相感じ利害相應ずること自家頭上の如く緊密ならねばならぬ。

國民にこの自覺あつて偏私なく、この協力あつて結合いよ〳〵堅く、斷乎として國難を排し猛然として新興の氣運を促進す。國民の自覺と協力とは啻に難局打開の關鍵たるのみならず、又まさに新興日本の意氣を中外に宣揚すべき一大旗幟である。由來我が國民は此關鍵を以て幾多の難艱を打開し、此旗幟を以て常に新興の氣運を源はし來つたので、此國史の成跡こそ、國民精神鼓舞作興の原動力にして、此精神の鼓舞作興こそ、社會教化の要諦であらねばならぬ。

一切の改良は人の改良であり、人の改良は心の改良であり、心の改良は教化の根本義である。古の聖主詔してのたまはく『**民ヲ導クノ本ハ教化ニアリ**』と、今上天皇陛下御即位の初勅してのたまはく『**內ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ、愈〻民心ノ和會ヲ致シ、益國運ノ隆昌ヲ進メムコトヲ念ヒ**』と、教化は政治の大本であり國運隆昌の基調である。聖上夙に軫念したまひ、其の實未だ擧がらず、不肖　さきに中央教化團體聯合會會長として、數次聲明を發して、其の

必要を力說し、立憲的忠君愛國の本義を明にして國民的自覺と協力とに待つ共同社會の生活を提唱して各位の協力を促し、擧國一致の美を顯揚せんことに努めたが、今此非常時に際し、外は滿蒙の權益を擁護して正義を世界に伸べ內は人心の不安を一掃して、國運の發展を計らんとするに當り教化の要、益〻切なるを想ひ、敢て素懷を吐露して教化關係各位の猛省を促し、眞に官民一致の努力を以て、政教相資け組閣の一大使命たる政治の淨化と人心の安定、國權の擁護と經濟の統制とに向つて一新時期を劃し各自の生活を安定して、明るく住みよき新興日本の建設に一歩を進めんことを望むのである。

今後の經濟はどうしたらよいだらうか

上田辰卯

經濟界の底知れぬ不況が次第に恐慌に變じ終に政治問題、社會問題と化して世の中は漸く混亂狀態を呈して來た。貨幣制度とかモラトリアムとかいふ言葉は、經濟學者か金融業者の外には口にしないことかと思つたら、昨今は都會のルンペンも片田舍のお百姓さんも云ひ出すやうになり、金と物、生產と消費、都市と農村、かゝる根本的の經濟問題を何とか速急に解決しない限り一揆暴動も起り兼ねない有樣になつて來た。

宗教といふものは元々精神主義のものであるから、如何に世間が經濟々々と騷がうと直接それに觸れなくてもよいものだ。「肘を枕にして樂しみその中にあり」と云つた人もあれば、「人はパンのみにて生くるものにあらず」と敎へた人もあるのだ。王城を脫れて入山乞食せられた佛祖のことは云はずもがな、だが、昔から物質の缺乏に堪へて、力强く精神

主義に生きた聖者は決して少くなかつた。誠に今日の人には、物質問題の解決で總ての人間の不安が一掃される如く考へて居るが、實際はそれは大きな誤りであつて、人間の安心の第一義といふものは一に精神の問題にかゝつて居るのだ。

試みに考へて見やう。今多くの人々が不足を訴へて居る金――假りにそれが一ト通り行き渡るやうに與へられたらそれで最早人生の不安はないのであらうか。米も衣も住も相當に與へられたら、それで絶對に安心と云へるだらうか。それ等は生活の必要品だから、それさへ與へられゝば生命の維持には脅かされないと云ふだらうが、併し生命といふものは決してそんなものばかりで保證されるものではない。歳も取るではないか。病みもするでないか。恐ろしい死の影は一切の生物が、生を得た瞬間から、あらゆる形で付き纏つてゐるではないか。

凡そ生きるものにとつて命程尊いものはない。經濟問題もそれに關聯するが故に、重大に取り扱はれてゐるのであるが、更にもう一歩突込んで考へて見やう。一體何が故に生命といふものはそれ程大事なのだらうか、何れは死んで行かねばならぬものに定まつて居ながら、何が故に闘爭、殺戮、混亂迄して維持して行かねばならぬのか。抑も人間の生きる目的といふものは何處にあるのだらうか。私はこゝに甚だ無遠慮なことを放言するやうだが、今汗しづくになつて智慧を絞つてゐる政治家も、日本を脊負つて立つのだといふ軍人も、金積を掌握する財閥も、農民を率ゆるリーダーも、恐らく大多數の人達は、この問題に就て明瞭なる解答を與へることは出來まいと思ふ。

吾々が宗教の世界から、經濟を批評し、解決して行きたいと願ふのは、決してかゝる盲目的のものではない。少くとも人間が生きねばならない目的を持つが故に、經濟の問題に入るのである。人間の生活は又決して孤立すべきでない、社會をなし、國家を形造るものである。然らばそこには共存共榮でなければならぬ。更に一歩進んで人間は現在のみを以て滿足すべきでない、永遠に我々の魂の向上を願ふであらう。宗祖の云はれた如く、今生に於て生死の道を究めずば又いつの世に究められるか解らぬ。今生

の中に六道輪廻の業を斷つて此度こそ佛身を成就したいものである。我々には生きることは大切である。金も米も大切である。何となればこれ等は畢竟如上の人間世間並に出世の目的を解決するになくてはならぬ糧であるから。

× × ×

經濟が既にある目的の手段として考究されるものである以上、こゝに述べる經濟政策なるものは、世上一般のそれとは著しく趣を異にするであらうことは、蓋し止むを得ないことである。物質生活を豊かにし、文化享樂の世界を進展せしめればよいといふ從來の經濟政策から見れば、或は文化の逆轉とも云ひ得るであらうし、幾多の非難攻撃のあることは充分豫期される。而もそれを敢てすることは「旦に敎を聞いて夕に死すとも可なり」と古人の云つた如く經濟を人生の目的を達成する一つの手段として考へる丈であつて、毫も國際貿易とか交換經濟の發達それ自身を目的としてゐないからなのである。

さて、今日の經濟不況に就て論議し、その克復策を研究して行かうとするには、先づ何が原因でこの大不況を來したかを確めねばならない。總て物の結果には必ず原因が潜む。そしてその原因を取り除かぬ限りその結果のみを論議しても何等の効果がある筈がない。そこでこの經濟恐慌の直接原因といふべきもの、更にその原因の原因と次第に遡つて考へて行つて見やう。

今日の恐慌の直接原因は、いふ迄もなく各國の通貨縮少（デフレーション）政策である。物資の量に比較して通貨の量の少な過ぎること、これが金と物との對立である今の經濟界には、通貨の騰貴即ち物價の下落となつて現はれて來てゐるのである。物價の下落といふことは製造業者、仲間業者、即ち經濟生活をしてゐる人々に利益の減少、或は進んで缺損を與へるからして、彼等は止むを得ず事業を縮少するか、或は廢止せねばならぬ羽目に陷る。これが失業者を產み、更にその失業者即ち收入のない人々の增加は、物資の一般的購買力の減少を來し、物價下落の動因となり、かくして循環的に不況が深まつて行くのである。又かゝる事業の縮少といふことは、反面に事業資金即ち活動する金が、一般から消

えて行く結果となり、金は次第に金融業者――それも大規模の銀行の金庫の中に隠れて益々通貨の縮少を深めて行くのである。

こゝに通貨の活動といふことを述べたが、この活動力の増減といふことは、又通貨量と重大なる關係を持つのである。例へば、東京市に電車が二千臺あるとする。それで一臺百人の輸送力があるとすれば、これが一日一回運轉すれば二十萬人運送することが出來る。然るに若し何かの事情で、その半數丈しか運轉することが出來ないとすると、乘客の半數即ち十萬人は乘るに車なしといふことになつて大混亂をする。併し假りにこの半數が一日二回の運轉をするとせば、車體總數は半分であつても、輸送力に於ては毫も變りはない。更らに極端に云へば車體が十分の一の二百臺になつても運轉回數さへ十倍にすれば、(實際には不可能だが)乘客には毫も不便を與へることがなくて濟む譯である。即ち輸送力から云へば、車さへ多くあつたからとて、車庫に入つて動かないのであれば、無いと同樣であるし、又運轉はしても回數が少なければ、量の少いのと同樣の結果となるのである。金に就ても同樣に考へ得る。電車の輸送力は、金の購買力と考へることが出來るので、曾て日本内地に紙幣が二十二三億もあつたのが、今日では十一億位になつた。數に於ては半分だが、然も物價は三分の一にも四分の一にも下落したのは、總量減少の外に、更らに回轉數が五割も七割も減少したからである。何故回數が減つたか。それは前記の如く通貨を忙しく必要としない銀行の金庫の中に入り、一般消費者即ち書取つた金を夕方費ひ、夕方取つた者は、更に明日の仕入れに費ふといふやうな、忙しい階級に渡る金が少なくなつたためである。

通貨の總量と、その回轉數の減少が經濟界の不況を促がしてゐる直接の原因だが、然らば何が故にかく減少したか、否減少せざるを得なかつたか。それは云ふ迄もなく金が特種の國――現在では主として米、佛の二國に偏在したからである。歐洲大戰前は云ふに及ばず、つい五六年前迄は米國を別にすれば日、英、佛は殆んど平均し、獨逸、伊太利、又その下位で平均して居つたのが、數年の間に著しい不均衡を呈して來たのである。日本でも濱口内閣が、金の解禁をする前迄は、内地に十一億、海外に一億餘、合計十二億以上も所有してゐたものである。それが三年ばかりの間に八億近くも流出して、現在では僅かに四億三千萬を殘すのみの有樣となつた。英國も亦同樣で曾ては世界の金融市場として誇つたものが、八年前金解禁してから次第に金保有高が減少し、それが年を逐ふて急速となり、昨春からは加速度的に流出して、遂に九月には金本位制度を停止せざるを得なくなつた。その他獨逸、墺太利の戰敗國も云ふに及ばず、伊太利、加奈陀、南米諸國等に至る迄金保有高の減少せざる國なく、それが悉く米、佛、二國に集中し、現在では世界金總有高百十二億弗の七割近く、即ち金額にして米國に四十億弗、佛蘭西に三十億弗も偏集されてしまつたのである。この金の偏集は何の原因からであるかは後に記述する積りであるが、かく他の國々が、次第に金保有高が缺乏して來たにも拘らず、一種の流行的に金解禁政策を取つた結果は、金を基礎として發行する紙幣の數量を著しく減少せざるを得なくなり、その結果たる物價下落が、更らに運轉回數を減ずるといふことになつて、益々通貨缺乏に拍車をかける狀態となつたのである。然らば金を集めた右兩國は好景氣であるかといふに、決してさうではない。これも他の國に劣らぬ不景氣であつて、米國の如き日本よりも遙かに甚だしいとさへ云はれてゐる。一例であるが最近米國のアパートにはピアノ付の貸室がいくらもあるそうである。それは好況時代に借間人が買整へたピアノを、昨今これを持ち運ぶ運賃さへないので、放棄したまゝに他に移轉する結果、所有主のないピアノが至る處の部屋に散在するのだそうである。米國が日本同樣金の輸出禁止をせねばなるまいとは、決してたゞ單なる想像的風說でないことが、この一事を見ても計り知ることが出來るのである。何故に金を保有しながら斯く深刻なる不況を味はねばならぬのか。それは各國の物價下落が、海を越え國境を越えて市場を壓迫するからである。米、佛の金と云つてもそれは前記のやうに、國立銀行の金庫の中に保有される丈で、云はゞ電車が車庫に入つてゐる丈で少しも活動資金として市中に流行しないから、金

の量の增加が少しも物價の昂騰を誘引しないのである。

金の偏在、通貨の縮少、運轉回數の減少、これ等が今日の經濟不況の直接原因であることは略否定するものはない。社會主義者、殊に財界の實況に迂遠な理論經濟學者等は、今日の狀態が生產過剩、利潤の減退から來る資本主義沒落期と斷定し、如何なる對策も無益であると論じてゐるが、私は決してそうは思へない。今日の生產過剩は、誤れる政策が齎らした極端な消費制限の結果であつて、これが相當に消費されて來るやうになれば、今日の生產高は過剩處か寧ろ過少と云つてもよいのである。これは一見生產過剩の如く見える丈であつて、眞實は購買力の不足に原因するものである。即ち物資の方面の影響でなく、その對立者即ち貨幣制度の影響であると斷ずるのが至當であり、而もそれは自然的の發生ではなくて、人爲的即ち各國の爲政者の誤れる政策に基くものであると論斷すべきであると思ふのである。人爲の過ちなれば、人爲をもつて修正され得る筈である。通貨制度の改正といふことが、漸く世上の問題となつて來た所以である。（未完）

阿含の根抵を探りて（其二）

中村清一

聲聞乘と佛乘

大乘教は一面に於て思惟によつてこの問題を理論上から解決する方法を採つたために、衆生が直ちに佛と同じ境地に進むといふことも結局出來得るものと斷定せられた。しかしあくまで體驗を重んじ現實の修行のみによつて解脫を得んとした在家の聲聞衆にとつては、釋尊と同じ立場に立つことは決して容易ではなかつたであらう。吾等は釋尊の敎によつて萬象が次々と吾心に接觸し來る五蘊無常の境涯を否定することを知つても、實際に吾等の日常生活は依然として五蘊の生活に他ならぬと感ずるであらう。假令心は現實の壓迫を離れて寂然たる境地に進むとしても、少くともこの肉體は日々に饑餓を訴へ心に對して種々の要求を提出し來るであらう。この肉體

がある以上感覺があり、感覺がある以上吾等の精神は之に對し受働的に働くと考へられるであらう。唯だ理論の上で五蘊を否定する立場を取つてもこの實際の體驗にして改善せられざる限り、それは單なる想像に過ぎぬものとなるであらう。聲聞衆の惱は即ちこれであつた。而も彼等は目のあたり師の人格を拜して、拳ち登りつゝ高嶺の月を仰ぐ登山者の如き心境を味つてゐたのであるから、決して末法の吾等の如き增上慢を起すことは許されなかつた。されば この惱を完全に現實的に解決して居られたのは唯だ師の世尊一人のみであつたといふべきであらう。大乘教徒は徒らに聲聞衆が佛道に進み得なかつたことを嘲けるけれども、聲聞衆が直接佛道に進まざりしそこには、寧ろ彼等の體驗的な深刻なる努力があらはれて居らぬであらうか。佛はこの弟子達の眞劍さを嘉し給うた。その結果、世尊は强いて理論によつて佛の境地を理解せしめんとはせられなかつた。聲聞衆が解脫と禪定とに向つて努力しつゝあるそこに佛道の一端が輝くのであつた。こゝに於て、釋尊は未だ得ざる人々に對して權の敎を設けられた。それは所謂聲聞乘であつて、弟子達の疑問を一應解決するに足り、而もそれによつて彼等の努力を一層眞劍ならしむる底のものであつた。——曰く、彼等は現世に於ては單に欲望の解脫と禪定の獲得とによつて外界の一切の事情に支配せられぬ精神的境地（「有餘涅槃」）を得るに過ぎないが、この現世の努力の成功せる程度に應じ來世には早晩、この肉體と有限的なる精神を滅して何等肉體上の束縛を受くることなき絕對自由の境涯（「無餘涅槃」）に進むことが出來る、云々と。これが所謂聲聞四果の說である。この敎には勿論矛盾がある。何となれば、これによつて弟子達の得たる所は彼等が最初に求めたる所ではなかつた。彼等は、佛が外見上五蘊の身にあるが如くにして而も實には五蘊を滅し一切の事物に惱まされざる靜寂の境涯にましますのを見て、自分等もどうかして佛の如くにならんとの切なる願よりして佛に歸依したるものであつた。然るに佛によつて授けられたるものは、嘗て求めたるものと全く相違してゐた。法華經譬喩品の始に於て舍利弗が昔を追想しつゝ述べた終日竟夜の歎といふのが是であつた。かるが故

に佛の眞の意圖は何時かは開顯せられねばならなかつた。而も之を說き示すまでは釋尊の無礙辯才を以てしても尙四十餘年の日子を要し給うた。これ偏に衆生の迷重くして大を與ふれば慢心して行を懈り、小を與ふれば卑下して理想を失ふが故である。――しかしながら、吾等は他の一面に於て阿含が旣に法華經の示す如き最高の眞理をも物語つてゐることを忘れてはならない。「佛は五蘊を滅せり」といふ阿含の覺は「吾は本佛なり」てふ法華經の大宣言と何處に根本的な差異が見られるであらうか。阿含の「寂滅」と法華の「寂光」とは結局同義異語に歸するものではなからうか。何となれば、その言葉にこそ消極と積極との差異はあれ、その言葉の表はす證の內容に至つては、全く同一と見られるからである。阿含の佛乘は聲聞乘の衣に覆はれてあらはれてゐるが故に、批判的眼光の鋭き人のみ之を看破することが出來るのである。かくて畢竟するに、阿含は佛の內證を人智の否定によつて暗示し、法華は之を積極的具體的に理解せしめんとして、之を人智に訴へ敎として完成したものであると論ずることが出來よう。

十二因緣觀について

近來十二因緣の敎說に對して大乘的な說明をなす學者が輩出した。これは以上の見地から見るも誠にさもあるべきことであつて、聲聞乘に覆はれざる阿含の佛乘を見出す上に適切なる研究法といふべきである。しかし、若し之を一步進めて、釋尊在世の說法は全く聲聞乘を加へざるものであり後者は後世の小乘敎徒が佛說を自分流儀に變改して傳へたものであるといふならば、これも亦餘りに極端な學說といふべきであらう。しかし、かくの如きことは史家の研究に委せるとして、こゝに一つ十二因緣の理論的解釋なるものを試みるとしよう。

老死―生―有―取―愛―受―觸―六入―名色―識―行―無明。

即ちこの敎は、初に述べた樣な理論的要求を充さんとして、老死の苦みの存在する根本理由を求め遂に之を無明に歸したものである。「老死」の苦みは何に緣つてあるか。それは「生」れるといふことに關聯して起る所のものである。然らばその生れるといふことは何に緣つてあるか。それは吾等が一個の生物として生物學的、物理的、及び精神的に（欲、色、無色の三界に）生存すること（「有」）に關聯して成立する事柄である。然らばその生存は何に緣つてゐるか。それは營養生殖を始とし其他生きること、そのことに關聯したる種々の本能的執着（「取」）によつて起る。さてこの執着は何に緣つて生ずるか。それは凡て事物に對する愛欲の心（「愛」）よりして起る。この愛欲は何に緣るか。それは外界の事物を感受して苦樂の情を起すこと（「受」）より起る。然らばこの感受は何に緣るか。それは苦樂の原因となるべき外界の事物が心に對し接觸し來ること（「觸」）より起る。然らばこの接觸は何に緣るか。それはいふまでもなく五官及心の感官的なる作用（「六入」）に基く。然らばこの六官のはたらきは如何。それは精神と外界との對立的存在（「名色」）より起るのである。然らばこの對立は如何。それは事物を外にあるものにして認識し分別する所の主觀的精神（「識」）あるによる。然らばかゝる主觀的精神は何に緣つて成立するか。それは客觀的時間的現實の根本形式（「行」）に基くのである。さて最後に、この現實の客觀的時間的形式（或は形成）は何に緣つて存するものであるか。そこで、旣に五蘊說によつて說明したるが如く、現實を客觀的時間形式に於て見ることは吾等の心の根本的な迷（「無明」）に基くといふのである。即ち無明とは、吾等が先天的迷妄によつて五蘊の境涯に束縛せられてゐることをいふのである。かるが故に無明滅すれば行滅し、行滅すれば識滅し、……乃至……生滅すれば老死の苦滅する。かくの如くして、吾等をこの現實界に於て惱ましてゐる生老病死遷滅無常の苦みは無明の滅によりて完全に斷除せられることゝなるのである。何と大膽な、又何と徹底した覺ではないか。而もこれは『是あれば彼あり、是なければ彼なし』てふ現實相互間に於ける必然的論理的なる關係（「緣起」）に基き、一つのものを滅しようとするには之と關聯ある他のものをも滅しなければならぬといふ、嚴密なる科學的態度の表明に他ならないのである。而してこの十二の關聯に於て無明と愛欲を滅することが實際上の重點になつてゐることは、之を一見するものゝ直ちに氣付く所であらう。――さて釋尊は

菩提樹下に於て始めてこの十二緣起の法を覺り給ひ、波羅奈に於て之を說く時には四諦の形で說かれたと傳へられてゐる。然らばその四諦とはどんな敎であらうか。

四聖諦の敎

さきに吾人は聲聞の敎には矛盾があるといふことを述べた。然らばこの敎を現に受けつゝあつた在世の弟子達はこの矛盾を實際如何にして解決してゐたであらうか。惟ふにこれ等の弟子達は一途に釋尊を信賴して、釋尊の說かるゝことならば假令理論上からは完全したものでなくとも十分之を信奉することが出來たのである。彼等は時をり師に對して佛の滅後とか世界の周邊とかいふ樣な種々の理論同題に對して質問することがあつた。然るに師はこれに對して、かくの如き思索的な事柄は未だ煩惱を斷たざる人々にとつては却つて有害であるとまで敎へられた。これが即ち毒箭の譬である。而も、弟子達は釋尊を慕ひ釋尊によつて導かるゝことを無上の喜としてゐたのである。彼等は、要するに釋尊に順ひ釋尊の說かるゝがまゝに實行してさへ居れば、結局に於て、凡そ人間の達し得べき最高の境涯にも達するものと信じた。かくの如き弟子に向つて說くべき敎は、勿論、理論にあらずして實踐であらう。理論は單に種々の邪見を破を消極的な武器に過ぎなかつた。而してこれは阿含敎化の根本方針ともいふべきものであつた。釋尊は、新しき人に敎を說かれるには、先づ種々の問答や譬喩等によつて徹底的に彼の邪見を一掃することに力められた。或は神力等を示して直接に彼等に驚きを與へられることもあつた。而して既に釋尊に歸伏し如何なる敎をも熱心に實行して見ようといふ決心の色をあらはし來つたとき、そこに始めて說き示される敎が即ちかの有名なる四諦の如きものであつた。而して四諦は釋尊の說かれる一切の敎の精要でもあつた。——曰く、人生は苦みである。(苦)この苦みは、よく〳〵考へて見れば結局實證のないものとして消え失せてしまふ樣な假空的のものではなく、寧ろ人生をよく考へ深く味ふことによつて一層その度を增して來る樣な最も深刻なるものである。即ちその苦みは根柢ある苦みであり、確たる原因を有する苦みである。然らばその原

因(集)は何であるかといふに、それは却々單純ではない。世の中に起る樣々の事實が盛く相倚り相助けてそれが結局吾等の苦みを作り出す樣に出來てゐる。吾等の思ふことなすこともその一々が苦の種となる。それ故に吾等の苦みの原因は數へきれぬ程多くの事柄の集合に他ならぬといふことが出來よう。けれどもかゝる多くの事柄の奧にはも一つ根本の原因といふべきものがある。然らばそれは何であるかといふに、それは吾等の心の迷に他ならない。煩惱(不合理なる愛欲＝無知を伴ふ愛欲)あるが故に吾等の生涯は萬事萬端苦の種となるのである。從つてこの苦みをなくすることは決して不可能とはいはれない。あらゆる事實をして苦の因たらしめる心の煩惱を滅するならば(滅)、そこには一切の苦惱を離れ一切の罪惡や非道を離れた淸淨無垢の境涯が存在する。これが即ち涅槃の境涯である。さて、然らば煩惱を滅するには如何にすればよいのであるかといふに、そこに佛陀は一切の人々の煩惱の病を治すべきよき方法(道)を示して居られる。この道を實行しさへすれば如何なるものも苦惱を離れて悅樂の人生を送ることが出來る。然らばその道とは何であるか。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八つである。——即ち、吾等は如來の敎によつて先づ人生に對する根本觀念を正しくしなければならぬ。次に、人生觀が正しくなつたならば、日々吾等があゝしよう、かうしようと思ふ、その心に抱く思を正しくしなければならぬ。第三には、かくして心の中が正しくなつたならば、それを外に表はす言葉を正しくしなければならぬ。第四には、唯だ口にいふ言葉を正しくするのみならず、身の行を正しくせねばならぬ。そうして、第五には正しき生活若しくは職業に從事すること、即ち宗敎と職業とは決して別物ではないのである。第六にはその職業のためなり他の目的のためなりに熱心に努力する、その努力を正しき方法によつてなさねばならない。目的は手段を選ばずといふやうな亂暴なことをやつてはならぬ。第七には、正しい努力をするにしても、それがいつもグラ〳〵と動搖して止まる所を知らないといふのではいけない。從つて、正しき信念を養ひその信念から生れる正しき目的に向つて常に心を一

處に制するといふ、落着きある態度を修養せねばならぬ。即ち、正念とは如來の教によつて得たる正しき信念を常に憶持して忘れぬやうにすることである。最後に第八には、右の專念により更に進んで、動中靜あり靜中動ありといふ樣に如何なる複雜な境涯に處しても心で寂然として靜まつてゐるといふ樣な修養を積まねばならぬ。然るに之をまづくやると野狐禪などゝいつて世事に冷淡になつたり人情にうとくなつたりする弊害を生ずる。そこで禪定といふことも釋尊の教に從つて正しくやらねばならぬ。佛を尊敬し教に從つて居れば、決して野狐禪に陷ることはないであらう。――以上が有名な八正道の教である。何と行き届いた立派な教ではないか。而して、この正しいといふことは實際に如何にすれば正しくなるのかといふに、それは――既に正念、正定の場合に述べた如く――すべて釋尊の人格を學び教を受けることによつて自ら解決される問題である。すなはち四諦の教は結局に於て實踐の教であり、しかもその實踐は釋尊を師としその感化によつて人格を正しくするといふことに歸するのである。かくして、阿含二百卷に盛られた釋尊の日々の言行は三千年を經たる今日に於ても尙、人格修養の鑑として吾々の金科玉條となつてゐるのである。

阿含經の開顯について

右の四聖諦によつても分るやうに、阿含の教は實踐を主とし、實際に自分の心を調養することによつて少しでも佛の境地に近づかんと努力せしむるものである。かくの如く體驗を重んじ現實の體驗以外に涅槃の境涯をあらはす特別の實在界を示さない教を「界内」の教といひ、又この涅槃に達する方法として專ら現實的な修行を積んで行く事を「事善」といふ、天台大師はこの意味に於て三藏教の特色を「界内の事善」と稱した。然し現實の體驗を求めつゝ而もあくまで實踐的な修行の方法を採用するとすれば、結局釋尊と全く同一の體驗を得ざれば已まぬことになるので、それは吾々凡夫にとつてなか〳〵の難事といふべきである。そこに「化城」(暫定的理想)を設けて凡夫の失望を防ぐ特殊の方便が必要となるのであつて、これが即ち阿含に說かれた聲聞乘の意義に他ならないのである。經典としての阿含經は佛乘に關する教義を說くに當つても屢々之を聲聞乘に飜譯しつゝ解脫してゐる。しかしながら聲聞乘を中心として阿含の全部に一貫したる體系を整へんとすることは、經典そのものゝ生き〳〵としたる中心生命に觸れる所以ではない、所謂小乘教徒はこの不自然なる試を敢てしたる結果として、佛の覺とは寧ろ緣遠い繁鎖な體系を作つてしまつた。こゝに於て大乘經徒はこの不自然なる小乘を否定して別に佛の證をあらはす所謂大乘の理論を作らんとした。經典としての大乘經も、法華部に屬する諸經を除くほか、多くは聲聞化したる阿含の教を出發點となし、或は之を彈訶して別に大乘的な立場を示し、或は之をそのまゝ誘導して大乘の思想に入らしめんとし、或は全然阿含の立場を顧みず直接に大乘の教を說かんとしてゐる。然しながら、佛教成立の眞の根柢たる阿含の佛乘を離れて佛の眞の證が考へられざることは當然である。從つて、これらの大乘教のみによつて佛教を知らんとするものは、兎角、理論に偏して人格を中心としたる宗教の現實的根柢を忘れ、さもなくば現實そのものに偏して佛の覺の宗教としての超越的な分子を逃するやうになる。この點に於て諸の大乘經中、阿含を眞に生かして用ふるものは法華經である。法華經は阿含をその眞意に照して、そこにあらはれたる佛乘を開顯する教である。(これぞ、諸經に於て未だ明さざりし「二乘作佛」の根柢をなすものである。)而して直接に佛の覺を明かにするに當つては、阿含に於て用ひられた消極的論法を取る代りに、寧ろ積極的に堂々とその内容を展開――「久遠實成」本佛實在――してゐる。佛の覺はこの消極積極の兩方面より考察するとき、他の如何なる經典によるよりも最も鮮かに窺ふことが出來る。『若し是の深經(法華)の聲聞の法(阿含)を決了して是れ諸經の王なるを聞き、聞き已つて諦らかに思惟せん。當に知るべし、此の人等は佛の智慧に近づけるなり』と。かくて知る、佛乘としての阿含經、眞實經としての阿含經の意義を知ることは、法華經の開顯主義を發揮せんとするものに課せられたる一つの重要なる任務であるといふことを。(次續)

日生上人を憶ふ

（其八）

ア、日生上人在せば

横濱　みどり

忘れ難い昭和六年三月十六日！　聖應院日生上人の御遷化は早や十五ヶ月の已前となりました、けれ共思へば思ふ程悲しい、いと惜しいことでございます。申せば女の愚痴とさげすまれませうが、アノ十七日に打變らせ給ふたお姿を拜し、その神々しいお顔　只今でも目にチラ付いて、如何に涙に濡されても消えばこそ、益々はつきりと心に映りまして堪え切れませぬ、こう書き續けて來るにも銀滴が二つ三つ……　ア、御生前幾年月かの御教化を頂きました　アノ親しい御聲も、これからは蓄音器に依るほか伺はれませぬ、折角樂しみに致して居りましたラヂオも今は必要ありません。今後は數多い御著述を拜して、自他共に御教にいそしみ、まぬがれ難い生死の險道を、不束者は出離させて頂くことかと思へば、モウ胸が一ぱいでございます。

『聖人去る時は七難必ず競ひ起る』とか。私の到らぬ氣のせいか、日生上人のおかくれ遊ばしてからは、天候もいと不順勝となり、世の中は急激の變化を見せつけられます。外には日支滿蒙の問題やら、それに關聯したいろ〳〵の大事が擡頭いたし、内には申すも　畏れ多い不祥の事柄が二回もおこり、更に先月の不穩事件や又農村極度の疲弊など、世間の有様は只事でありません。時々いやな直感に女の身でありながらも安閑としては居られませぬ、早く尊い慈悲の御教に　高位の方々から先づ耳を傾けて頂きたいものとお祈り申上げる時に、ア、日生上人在せば……と深い歎きを催します。併しこれは返らぬ愚痴と心を取直して、どうか　上人の晩年に最も御信頼遊ばしてゐられた方々は、かゝる切迫せる際にこそ一丸となつて、上人の御志のあつた處を充分お傳えして頂きたいと、及ばず乍ら朝夕御寶前でお祈り致して居ります。

南無妙法蓮華經

世の爲めに日生大上人を憶ふの餘りよめる

名古屋　彌重まさ子

うつし世を　神さりませど　遺されし
言の葉さかえ　花さきかほる
釋迦牟尼の　御使なりと　今さらに
思はる節の　毅き君かな
山も裂け　月のかつらも　散るばかり
法の雄さけび　とこしえに活く
秀てゝは　富士より高く　ひらきては
やまと櫻も　さながらにして
幾たびか　世に出でませと　いのるかな
道に生れて　道に生きつゝ

記事

統一團協賛會々報

本會は五月號に御報告の通り、爾後第一目的に向つて進捗中でありますから、遠からず其詳細な顚末を發表し得る事と歎んで居ります。

勿論本會の成すべき淨業は、一々茲に申述べませんが、幹部一同はこの國歩未曾有の難關に善處し、この機會に全能力を發揮せなかつたならば、日蓮主義は最早其存在の必要さえもないと思つて、時代對應の活躍に劃策精進致して居ます。從つて本部の會合御案内の節は、爲法國萬障御繰合せ是非御出席下さるやう豫めお願申上げて置きます、唯地方遠隔の

遊んでつまらぬ考を起すよりはましだと思ふが、マアよう考へてご覽ん」……

急く用事のある榊原氏は、再び自轉車を馳せた。

× × ×

數日經つて、金さんが見馴れた盤臺を擔つて元氣よく家内連れでやつて來た。

アレから金さんは、正直に、そうだ、どうせ遊んで居てもつまらぬ、マア旦那の言ふた溝渠漾でもしてみやうかと、早速自分の家の前丈け二間程綺麗に漾え上げた。これは誰れもやることでしやうが、そこに活きた數が與へられた。則ち金さんは折角綺麗に自分の前をしたが、汚い水は遠慮なく勢込んで家の前に溜つて來る、そこでアヽ旦那はつまらぬことを言ふものだから、正直にやつたがこれでは却て臭くていけないアヽ馬鹿々々しい……、併し待てよ、これではたまらぬから、モー少しこの水のはけるやうにしてやらうと、それより下手を數間漾えて行つた、段々行くに從つて汚水は面白いやうに流れ去つた。これは氣持がよいぞ、金さん自ら嬉しく感じた。それで其翌日は上手の方も遊んで綺麗に漾えた。

驚いたのは家主である。金さんは氣でも狂つたのか、どうもアノ男が急に誰にも頼まれないのに、汚い人の厭がる下水の掃除をやつて呉れる、何とした事だらう、併しアノ人も近頃は商賣にも行けず、定めし困つてゐるであらう、斯んなに綺麗に掃除して貰つて家主として知らぬ顔もして居られない。「金さん、お陰樣で洵に綺麗になつて有難う、これはホンノ鼻紙だが取つておきな」と、二圓包んでくれた。一方近所の長屋の連中も默つて見てはをれない。金さんのおかげで、雨が降つても水はけがよくなつてホントに氣持ちよい、皆さんどうです、金さんも近頃仕事もなくて困つてゐるらしいからお互少しづヽでも集めようではないかと、皆々が持出しで二圓ばかり呉れた。

意外の事に金さんも、お嬶さんも夢かとばかり歡んだ。而して序だからモー少し先の方も掃除してやれと、其翌日はお嬶さんの手傳でズーッと先まで、二日ばかりかヽつて大淩漾をやつた。これを見た地主が喜んだ、何と奇特な人だらうといふので、少しだけれども三圓呉れた。合計金七圓を資金に金さんはさヽやかな仕入が出來て、今日は本の馴れた商賣に出られたといふので、二人揃つてニコ／＼御禮に來たのであつた。

× × ×

「マア山本さん　こんな話もあるから、人は何もせんで遊んでゐることは、結局は神經衰弱位の落ちだから、何でもよい自分のやれさうな仕事をやるんですね」「旦那よく解りました、有難うございます、私は自分で出來ることならば何でも致します」と。

正直な山本さんは其翌日早速廣告ビラ貼りに無料奉仕した。それは決して無料とはならなかつた、それが動機でアノ人はよく働く、感心だ、眞面目だ、正直だといふので、昨今山本さんは毎日忙しく働いて悦び感謝の日を送つてゐるといふ。

農村を想ふと都會は有難い、恩惠に浴せる都會の人は農村の氣の毒な同胞を救つて頂きたい。

教報

統一團本部活動誌

毎月少なくとも、一回は座談會なり、研究會なりを開いて、大にお互に練りあふことは、義法の上からも、亦意志の疎通からも、必要なことであるとして、本部教務部の當番は、**五月二十六日**午後五時每恩園に會合した。出席者、和賀義見師、梶木顯正師、山口智光師、中村清一氏、田中道爾氏、磯部滿事氏。

先づ去十五日の不穩事件の内容眞相等に就て批判されたが、これは憚る處あつて發表は致しかねる。次に田中氏の提案で、過日同氏が高野氏及田中氏と語り合つた實在論に及んだ。彼の空無の見を討議し、般若の思想から法華に進展し、中論は顔色なく、何と謂つても彌々法華經の卓絶せる點が列擧されたり、和賀師の無明を單に迷とする勿れ等に就て、梶木師、中村氏等の論難もあり、其他同樂同時說や、又我本行菩薩道の經文等を引いて各自熱辯を交へ、法益多大なるを感じた。最後に一同合掌し夜で修法奉行し、七時より街頭布教へと進出した。

二十六日　淺草三味線堀　午後七時半梶木師開會を宣言し。續いて磯部氏起つて、人々よ先づ重擔を去れ、瓦礫を捨てゝ金銀を把め、而して各自懺悔の服を着よ、然らば進行自ら現はれんと結び。續いて田中氏は、折柄奉持せる本部の團旗を拜し、恩師本多上人の法衣に錦糸鮮かに刺繍された感激深い統一の意義を詳說し二百の聽衆に甚深の發憤を促がした。續いて中村氏は、順々として國家の現狀に鑑み、國と人と數の三の關係を通俗的に、而も熱誠を込めて力說し。續いて山口師は、珠の如き音吐朗々大に正を立てゝ此國を安んぜざる可らずと、立正大師三大誓願を敷衍し

た。時正に十時を過ぎ、査公は餘り聽衆多くして交通に支障を來さゞるやを警告し、吾等協力して之が整理に勉め、其間に河合氏は、波斯匿王十夢に就て簡單に語り。終りに和賀師立ちて世相を論じ、吾等國民は速かに法華の大精神に復れと結び。最後加藤恵太郎氏は、日蓮主義中の正系傍系を一言して　陛下の萬歳を主唱し、一同之に和唱天地に轟く。當夜數名の關員有志の奉仕あり、且つ齊藤氏の茶菓の御供養をうけ十一時散會した。

數十部の統一誌及び數百のリーフレットを施すことが出來て悦ばしく思ふ。

六月六日　雨天にて休講

同　十六日　午後四時半有志の座談研究會を報恩閣に開催した。開會に先つて　日生上人御命日正當の法要を修し、五時半より「釋尊の教と同時代の印度思想」と題して講論縦横に七時半に及んだ。來會者、中村清一、田中道雄、池田悦太郎、槻木顕正、上田辰卯、石川隆一、岸野藤右衛門、本田健二、河合陟明、井上道太郎、池田新一、川西金市、山口智光、磯部瀧事等の諸氏並に　日生上人愛孃月子女史も列座されて居た。

現在のやうに逼迫せる場合に、右の題は甚だ時代離れがしてゐるやうに感ぜられぬでもないが、再考すれば、何がこの今日あらしめたか、又いかに之を打開して行くべきものであるか。則ちその根本をなすものは人心であるまいか、人は何の爲めに生きねばならぬのか、人生の意義、それに對して正しき解決を與へるものは實に佛教である。一體印度宗教の初期、吠陀の神話時代から次の優婆尼沙土の哲理時代に於ては、自然現象の中に靈力ありと認め、主として「梵」（ブラーハマン）を立てゝ崇拜し、一方には婆羅門教固成時代となつて梵天とか自在天といふ恰度基督教の天地創造神のやうなものを擡げて、神に人格ありとか、イヤ非人格だとかの思想上の諍の烈しかつた時代、所謂一面に於ては民衆の自由を階級制度で束縛し、宗教は極めて煩瑣な儀法を設けて貴族的であつた反面には、山林に遁れて解脱の法を冥想し苦行を續けたり、或は又破壞派があつて極端な現實主義、本能的な享樂主義、それは現代と少しも異はぬやうな世相に、大聖釋尊の御出現あつて在來の因果、輪廻說に根本的の明斷を與へられたのであつた。無論釋尊は思想界の擾亂を好まれない「我　世ト諍ハズ　世間　我ニ諍フ」といふ鹽梅に在來の厭世觀や智解脱の如き思想には苦集滅道の四諦や、正見　正思惟　正語　正業　正命　正精進　正念　正定等の八正道を配したり十二因緣の法門を以て極めて穩健に夫等の思想を醇化されたのみならず、從來の理論や冥想に耽つてゐる煩瑣學をば、釋尊は說明や理論よりも「佛教ハ行ヲ貴ブ、不行ヲ貴バズ」といふ格で實行を重んぜられ、我等の日常生活に適切な教を垂れ給ふた。それは決して諸行無常　諸法無我及び寂滅涅槃の三法印にのみ留まるものでなく大に伸びて一切の政治產業經濟軍事等に及んでゐる、實に驚歎すべき教である。これ今日の世相に對して最も研究すべき根本的のものとして擇ばれた題であつた丈けに舌戰實に火の如く各自其所信を披瀝された。從つて二時間位の割當てにはあまりに問題が大きかつたが、夜間街頭講演の爲めに辛ふじて切上げ、食を廢して三味線堀に出陣した。綿引氏始め數名の熱誠の士女は現場に待ち儲けられてゐた。

田中道雄氏は開口一番現代の危急より市民の覺醒を我等同志に聞けと宣し、次で綿引弘氏は國家興隆は教化を旺んにすべき趣述し、磯部瀧事氏は失業生活苦救濟と、教化の密接不離なる關係の實例を指摘し、中村清一氏は吉人の使命に及んで一般の覺醒を促がし、河合陟明氏は人生の眞意義生命問題と本佛の圓慈觀を述べ最後に山口智光師は國民の重大責任を論じて閉會を告げた。將に雨降らんとする夢天、重苦しき五月雨期の夜にも拘らず、二百に近き聽衆は十時半に到るも熱誠に耳傾けた。殊に愛十塞の自轉車が路傍に乘り捨てられて、同志の警戒に事故もなくして幾百枚の有意義なるリーフレットの配布に、一同感謝しつゝ散會したことを合掌する。

今晚も貴聽衆よりテーブル茶菓、殊に見事なバナナの御供養に同志は深い感謝を捧げる。

大阪教報

五月十二日　〃　圓寺、伊東法華會を修し、現代結人の修養　吉永師。七宵莊嚴の夜　吉塚布教師。

二十日　鶴橋水谷宅にて、唱題の意義　京藤師。

二十二日　蓮成寺にて、信仰の德と力　京藤師。現代思潮と日蓮主義　吉永師。

六月二日　堂圓寺にて、立正結人會入信の動機に就て　若林師。慈悲と報恩　京藤師。

八日　山本宅にて、道德の根柢　京藤師。

九日　立正青年團員吉田愛太氏の壹力に依り、鶴橋にて一大天幕布教を開催、聽衆無慮千名、開會の辭　清原氏。我國家の前途を如何　阪上氏。正信と迷信　若林師。開會より平和へ　吉永師。現在の世相と日蓮主義　京藤師。最後に琵琶講談、爆彈三勇士　水也四平淵氏。

十二日　堂圓寺にて、立正安國の精神　京藤師。迷より悟へ　吉永師。何れも頗る盛會多大の效果を奏せり。

福島教信

五月六日午後二時二十一分二本松通過にて仙臺部隊酒井上等兵の遺骨仙臺に向ふ因つて見送り體經す。

五月十五日二本松佛教不矣會の托鉢願行。

五月十七日夜薬華寺に於て題目講修行。

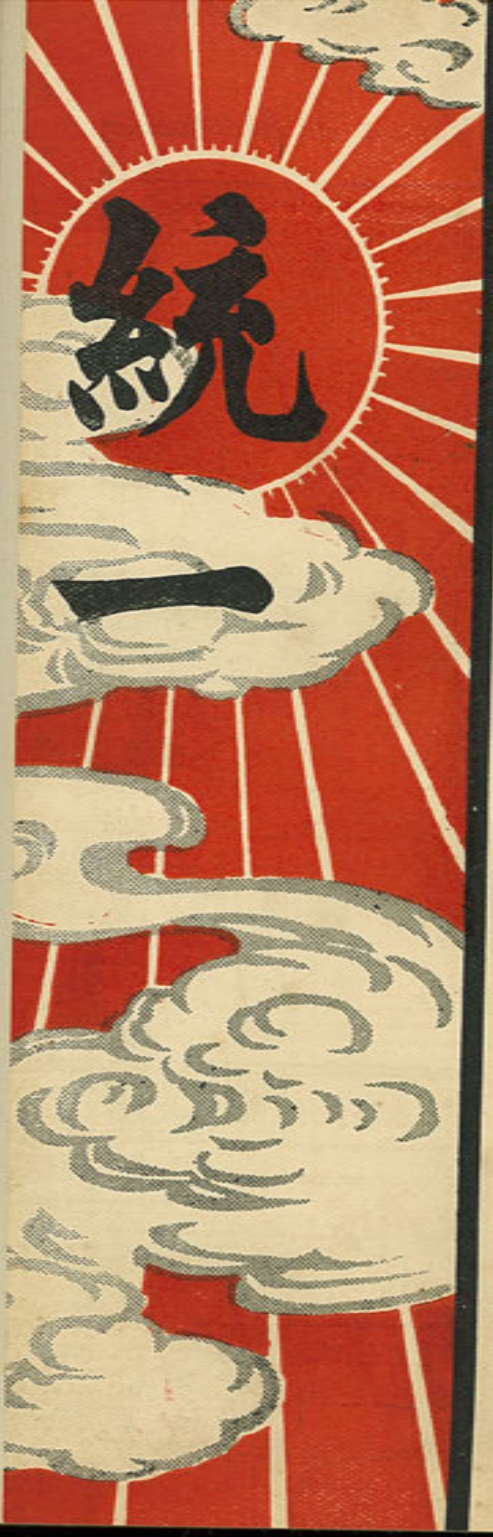
五月十八日午後六時八分二本松通過にて傷病兵二名山田重三郎上等兵の遺骨を見送り仙臺に向ふ。

五月二十五日午後一時五十七分にて高田部隊の於隊兵を出迎ふ。

圓貴誌料領收

自五月二十一日
至六月二十日

一金貳圓貳拾錢也　東京府　藤崎勘三郎殿
一金貳圓八拾錢也　京都　有田宏道殿
一金貳圓貳拾錢也　明石　梶川福太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　廣島　中村美津殿
一金六圓拾五錢也　東京　渡邊清吉殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　手代木常藝殿
一金壹圓五拾錢也　大阪　東峰太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　神戸　廷廣純靜殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　東端愛吉殿
一金貳圓貳拾錢也　同　大河原徹殿
一金參圓也　同　川奈綛作殿
一金貳圓貳拾錢也　同　高田直三郎殿
一金貳圓貳拾錢也



目次

法華經の信解（其三）……日生上人
今後の經濟はどうしたらよいだらうか……上田辰卯
不具の身を輝かせ……松尾清明
孝養の上人……毎文二郎
記事
○統一團財團法人許可報告式及寄附行爲
○見聞錄
○教報
○統一團協賛會決算報告
○財團法人統一團宣傳綱領及團則
○團費誌料領收

第三十七年八月號

財團法人 統一團發行

一金貳圓貳拾錢也　名古屋　牛田兵保殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　澤田萬壽穗殿
一金貳圓貳拾錢也　高岡　林長吉殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　田中米吉殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　福井治三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　群馬縣　谷本繁殿
一金壹圓貳拾錢也　高岡館　廣田竹吉殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　河井カヒヤ殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　河本梅藏殿
一金壹圓六拾錢也　千葉　上原浜次殿
一金貳圓貳拾錢也　紀伊　乾涼甫殿
一金貳圓貳拾錢也　東京寺澤信平殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　竹内文治殿
一金壹圓貳拾錢也　同　西村正殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉縣　豊木博殿
一金貳圓貳拾錢也　長崎縣　中村龍精殿
一金四拾錢也　廣島縣　村上信夫殿
一金八圓四拾錢也　東京　佐野至誠殿
一金貳圓貳拾錢也　同　長澤信一殿
一金六拾錢也　名古屋　石上愛子殿
一金六圓九拾錢也　東京　菊地峰三殿
一金五拾錢也

右難有入帳仕候也

「統一」會計

統一定價

一部	金貳拾錢 送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢 送料共

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和七年六月廿四日印刷納本
昭和七年七月一日發行（第四百四十八號）

不許複製

編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地　都印刷所　電話高輪六〇二四番
發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　統一發行所　振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ